

山茶が動かす民族間関係史

片岡 樹 氏

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

東南アジア大陸部の山地では、21世紀に入り空前の山茶ブームが発生している。これは主に中国のバイヤーが普洱茶の原料として東南アジアの野生茶に注目し、高値での買いつけを始めたことに由来している。もちろん山茶の繁茂する森は近年初めて発見されたものではない。現在みるような山茶の森は、森と人々との長期間の関わりという前史を経て、ようやく出現してきたものである。モン・クメール系先住民による後発酵茶生産、チベット・ビルマ語系山地民による自家消費用釜炒り緑茶の生産、中国系移民による茶葉の買いつけなどが、山地に移民の波を呼び込み、地域の人口構成を変化させてきた。本報告では、山茶をキーワードに地域社会の変遷を見ることで、現在の山茶ブームの背景には諸民族のダイナミックな移住史が折り畳まれていることを示したい。

日時

2018年4月20日(金)
16:00~18:00

場所

京都大学総合研究2号館4階AA447



<お問い合わせ先>

小坂：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
kosaka[at]asafas.kyoto-u.ac.jp

柳澤：京都大学東南アジア地域研究研究所
masa[at]cseas.kyoto-u.ac.jp